

第6学年1組 国語科学習指導案

第2校時 場所 6年1組教室 指導者 溝上 剛道

1 単元名 作品の世界をとらえ、『私のやまなし論』を創ろう（「やまなし」光村図書6年）

前期前半、詩「せんねんまんねん」の解説文をつくる活動に取り組んだ子どもたち。解説文を書く中で生じた困りごとから切実な問いを見だし、問いの解決と言語活動の再考に没頭していく姿が見られた。その中で、一人一人が叙述を基に作品に対する考えをまとめることができたが、一方で、考えの形成と精査・解釈を行き来しながら視点を広げ、自分の考えを深めていくことには課題が残った。

そのような子どもたちに、本単元では「やまなし」に出合わせる。作品に対する考えの解説文をつくり、つくりかえていく中で、言語活動への取り組み方を調整しながら言葉による見方・考え方を働かせ、よりよい考えを創り上げるたのしさを実感してほしいと願う。

そこで本単元では、言語活動の枠組みに自己選択の要素を取り入れた単元を構想する。単元導入では、初読時の作品に対する素朴な疑問や思いを基に、暗示性やメッセージに着目して自分の考えをまとめる言語活動として『私のやまなし論』を設定する。さらに、その『私のやまなし論』の章立てを自分で考えるようにしたり、互いの活動状況を確かめられるツールを活用したりすることで、子どもが自ら言語活動への取り組み方への調整しながら、言葉による見方・考え方を働かせ、「深い学び」を生み出していけるようにする。

2 単元について

- (1) 本単元では「やまなし」を学習材として取り上げる。文章を読んで理解したことに基づいて、自分の考えをまとめる力の育成をねらう。

「やまなし」は、「私」という語り手によって一人称視点で語られる外枠と、三人称視点で二ひきのかにの子どもらに寄り添った視点で描かれる「五月」「十二月」の二枚の幻灯からなる額縁構造の物語である。平易な言葉で綴られた童話でありながら、暗示的な表現が多く、「何が言いたいのか」「どういうこと？」といった「分からなさ」をもっている。しかし、多くの先行実践で明らかにされているように、かにの兄弟の心情の変化のそのきっかけとなる「上から来たもの」が象徴するものを「五月」「十二月」で対比的に捉え、題名の意図を作者の生き方・考え方と重ねながら読んでいくことで「徐々に分かっていく」あるいは「あるときふと分かる」作品でもある。これらの特徴をもつ「やまなし」は「考えの形成」を指導事項とするのに適した作品と言える。

そのような学習材の特徴を生かし、本単元では考えの形成の力の育成のために、作品に対する自分の考えをまとめる『私のやまなし論』をつくる言語活動を核にした単元を構想する。

- (2) 子どもたちは、詩「せんせん まんねん」において、本単元と同様の指導事項を設定し、自分の考えを文章にまとめる学習を経験してきている。本単元で、物語を読んで理解したことに基づいて、自分の考えをまとめる学習は、「海の命」において、物語を読んでまとめた意見や感想を共有し、自分の考えを広げる学習につながっていく。

- (3) 本単元に関する子どもの実態は、次の通りである。（調査人数：36人）

- ① 文学的文章を読み、比喻や反復等の表現の工夫に気付くことはほとんどの子どもができる。その表現の効果についても、半数以上の子どもが一人で考えをもつことができる。しかし、その表現が暗示していることや、作品全体とのつながりまで考えることができる子どもは、まだ少ない。
- ② 自分の考えを文章にまとめる活動については、自由作文形式の場合、苦手意識がある子どももいるが、モデル文やアウトライン等があると、取り組みやすくなる傾向にある。

- (4) 指導にあたっての留意点は、次の通りである。
- ① 単元導入では、初読時の作品に対する素朴な疑問や思いを基に、暗示性やメッセージに着目して自分の考えをまとめる言語活動として、『私のやまなし論』を設定する。
 - ② 第二次では、『私のやまなし論』をつくる活動を中心に進める。その際、自分が立てた視点や問いを基に『私のやまなし論』の章立てを自分で考えるようにする。この「章立て」を一人一人に委ねることで、「考えの形成」に至る過程を自ら作っていくことができるようにする。
 - ③ 言語活動への取り組み方の調整の一つとして、自己選択型の話し合いを促していくために、ロイノート（学習支援アプリ）や拡大教材文等を活用して、互いの活動状況や着目している叙述等を共有しておく。
 - ④ 本時では、心情の変化や情景描写と関連付けて全体像を捉え直し、作品に対する自分の考えをつくりかえていけるように、賢治の理想と重ねながら「かわせみ」「やまなし」の象徴性を話し合う場を設定した上で、各自での言語活動の再考を促していく。

3 単元の目標

- (1) 比喩や反復などの表現の工夫に気付くことができる。
- (2) 物語の全体像について、文章を読んで理解した内容や表現の効果、作者の生き方・考え方を関連付けながら、自分の考えをまとめることができる。
- (3) 言葉がもつよさを認識するとともに、進んで読書をし、国語の大切さを自覚して思いや考えを伝え合おうとする。

4 指導計画（11時間取り扱い）

学習活動	主体的・対話的で深い学びを生み出すための教師の支援	時間
1 単元の見通しをもつ。	○ 初読時の疑問を基に「クラムボンとは」「何が言いたいのか」等について話し合わせた上で、研究者の中でも様々な解釈があることを伝え、一人一人が文学研究者として自分の考えをまとめる学習に取り組む単元の課題を設定する。	2
	文学研究者として自分で<研究の視点>を立てて物語を読み解き、「私はこの作品をこう読んだ」という自分の考えを『私のやまなし論』としてまとめよう。	
2 『私のやまなし論』をつくる。	○ 『私のやまなし論』の章立てを一人一人に委ねることで、自分の考えをまとめる過程を試行錯誤できるようにする。その章立てや着目している叙述など、各自の活動状況を確認合えるツールを準備し、自己選択型の話し合いを促す。 ○ 比喩や色彩語、擬音語・擬態語等に着目して情景を図化したり、心情の変化や情景と作者の生き方・考え方とを関連付けて言葉の象徴性を捉えたりしようとしている姿を価値づけて、言語活動への取り組み方のモデルとなるようにする。 ○ 全体では、個々の見方・考え方を表出させた上でそれぞれの視点を整理し、各自で言語活動を再考する場を設ける。	本時 5 7
3 単元の学習を振り返る。	○ 互いの『私のやまなし論』を読み合い、単元を通して身につけてきた力を振り返る。その上で、適用課題に取り組みませ、自分がそれらの力をどれくらい使えるようになったかを振り返ることができるようにする。	2

5 本時の学習

(1) 目標

賢治の理想と重ねながら「かわせみ」「やまなし」の象徴性を話し合うことで、心情の変化や情景描写と関連付けて全体像を捉え直し、『私のやまなし論』を再考することができる。

(2) 展開

時間	学習活動	子どもの思い・姿
5	1 前時までの活動状況を確認し合い、本時の見通しをもつ。	<ul style="list-style-type: none"> ○ かにの心情の変化のきっかけは分かったけど、やっぱり物語の意味は分からなかった。 ○ きっかけは「かわせみ」と「やまなし」だよ。だけど、なぜ「十二月」にしか出てこない「やまなし」が題名なのかが分からない。
20	2 「かわせみ」と「やまなし」の象徴性について話し合う。	<ul style="list-style-type: none"> ○ 「かわせみ」と「やまなし」って何かの暗示なのかな。何を意味しているんだろう。 ○ 「イーハトーブの夢」の「暴れる自然」というのをかわせみで表しているんじゃないかな。 ○ 僕はかにたちの心情から考えたんだけど、かわせみによって恐怖を感じているから、「暴れる自然の恐怖」は確かに表れていると思う。 ○ 逆に、やまなしが落ちてきたとき、かにたちはすごく喜んでいるよね。小さな喜びを見つけることの大切さを表しているのかな。 ○ やまなしが落ちた後の情景描写は、それまでよりさらに美しく描かれていると思うんだけど、それってかにのうれしさを表しているのかな。 ○ かにの心情や情景描写と賢治の生き方・考えを関連付けて、もう一度考え直してみよう。
15	3 自分でさらに研究したいことを考え、少人数で話し合ったり、「私の『やまなし』論」を書き直したりする。	<ul style="list-style-type: none"> ○ 逆の見方をすると、やまなし自体を際立たせている感じもするよ。やまなしみたいに、他の誰かを幸せにするような人でありたいという思いが込められているのかもしれないね。 ○ これまでは単に情景描写で「五月」と「十二月」を比べていたけど、それを物語の全体像につなげて『私のやまなし論』が書き直せそうだな。 ○ かにの心情の変化と、かわせみ・やまなしの物語の中での意味もつなげて見直せそうだよ。 ○ 「五月」の情景も美しく描かれていると思うから、単に「十二月」だけがいいという考えは納得いかないな。もう一回話し合いに行ってみよう。
5	4 本時の学習を振り返る。	<ul style="list-style-type: none"> ○ 今日は「かわせみ」と「やまなし」が何を表しているのかを考えたことで、これまで研究してきたこととつなげて全体像が掴めてきた。次回はこれを基に、自分の考えをまとめ直していきたい。



これまで、一人一人が<研究の視点>を立て、それらを全体像につなげて考えようとしています、なかなか解決の糸口がつかめていない子どもがいます。そこで、本時では「かわせみ」「やまなし」の象徴性に焦点化して話し合い、「賢治の理想」を一つの材料として、「やまなし」の作品世界を意味づけていく学びを生み出していきます。

主体的・対話的で深い学びを生み出すための教師の支援（発問・指示，教材・教具，評価）

- 前時で解決できなかった問いや困りごとを出し合わせる。例えば「かのにの気持ちの変化とそのきっかけは分かったが、そこから何を伝えようとしているのかが分からない。」「『五月』ではかわせみが落ちてきているのに、なぜ『十二月』にしか出てこない『やまなし』が題名なのか。」など、物語における「かわせみ」や「やまなし」の意味を問い直すことにつながる発言を基に、次の問いについて話し合う場を設定する。

「かわせみ」と「やまなし」は、何を表しているのか。

- 前時までに各自がつくってきた『私のやまなし論』を基に、「かわせみ」と「やまなし」によって、「五月」と「十二月」の世界がそれぞれどのように変化したかを確認する。
- 資料「イーハトーブの夢」や賢治の他作品と関連付けて考えている子どもに発言を促す。例えば、「イーハトーブの夢」の中の「暴れる自然」「やさしさ」などつなげて「かわせみ」「やまなし」が何を表しているかを解釈している考えを取り上げ、それに対してどう思うかを問うことで、「象徴性」に焦点化して話し合えるようにする。
- 話し合いが「象徴性」のみに偏り、「やさしさ」「平和」などの抽象的な言葉になっている場合は、かのにの心情の変化やそのきっかけとどうつながるのかを問い返したり、情景描写から考えて意味づけしようとしている子どもに意図的に指名したりして、叙述に立ち返って考えられるようにする。
- 板書では、それぞれの意見が、「かわせみ」と「やまなし」が暗示していることについて、かのにの兄弟の心情の変化や情景描写、賢治の生き方・考え方をどのように結び付けているかを整理し、これから自分がどんな視点で『私のやまなし論』を再考していきたいかを考えさせる。
- 活動3では、次のような姿を見取って個別に価値づけたり、必要に応じて同じような困りごとや問いをもっている子ども同士で関わり合いを促したりしていく。

- ・ 全文プリントに立ち返り、新たな視点で関連付けられる叙述を探そうとする姿
- ・ 全体やグループ等で話し合ったことを基に、情景描写やかのにの心情の変化と物語の全体像とを関連付けて『私のやまなし論』を見直そうとしている姿
- ・ 自分の<研究の視点>を見直し、章立てを修正しようとしている姿 など

- 上記のような姿を全体で取り上げ、学び方のモデルとして価値づけていく。その上で、一人一人で自分自身の学びを振り返る時間を設定し、「①何ができ、何ができなかったか」、「②それは、学び方として何が良かったからか、次回はどう改善したいか」を振り返りの視点として確認する。

【評価】

情景描写やかのにの心情の変化など、複数の視点から物語の全体像について捉え直し、『私のやまなし論』を再考することができる。

（『私のやまなし論』の記述，振り返り）

